

2 読者のひろば

漢詩紀行：「伊勢神宮内宮」

藤野 仁 三*

伊勢神宮では、社殿や神宝類を20年ごとに造り替える。これを「式年遷宮」という。この伝統は持統天皇（奈良時代）の御代に始まり、1300年余の歴史をもつ。既に61回の遷宮が行われ、最近では平成5年に行われた。今、平成25年の遷宮に向けて準備が進んでいる。

遷宮は、神々が住む住居はできるだけ清浄に保ちたいという願いと古来の様式を正しく伝えたいという思いから行われるものだが、それではなぜ「20年」なのか。木造建築の耐久年説、技術伝承説など諸説がある。また、古代の暦法では20年に一度11月1日と冬至あるいは元旦と立春が重なる日があるのでそれを寿ぐという説（原点回帰説）もある（所功「伊勢神宮」）。

いずれの説にせよ、近年では式年遷宮の伝統維持は容易ではない。その理由の一つは用材の枯渇。檜の適当な原木が少なく、今では木曾から調達するという。神宮では将来に備え、宮域内での造林に努めている。

古い社殿の檜材はすべてリサイクルされる。たとえば正殿の柱は、遷宮の時に宇治橋のたもとに立つ大鳥居に用い、次の遷宮のときに別の場所に移しさらに20年のお勤めを果たしてもらうことになる。

五十鈴川にかかる宇治橋を渡るとまさにそこは神域である。人工的に管理されていながら、自然の厳かさと清しさに満ちた不思議な空間が広がる。

今夏、伊勢神宮内宮にお参りしたときの印象を以下のように詠んだ。

山川草木発清風
神域森巖老樹崇
殿舎宝財都造替
千年杉下式年宮

（脚韻：風、崇、宮）

江戸時代は「お伊勢まいり」が民衆の定番コース。1830年には半年で約500万人が参宮したという。当時の日本の人口が約3000万人だったというから6人に一人はお参りしたことになる。当時は神域に入れば旅行気分も抜け、清浄たる雰囲気に心も洗われたことであろう。

後世、宮沢賢治は次のように詠んでいる。

五十鈴川水かさ増してあらぶれの
人の心もきよめたまはん



伊勢神宮・内宮御正宮
（提供：神宮司庁 広報室）